青楓

第二号

戸畑高校二八会

青楓（あおかえで）

「青もみじ」ともいい、いまだ青い楓のこと。青は「青春」の青を表す。
新緑のころ、楓が風に揺られ、手と手をつないでいる様子から別称「結び葉」とも言う。
若かりし頃の思い出を胸に、新しい感動を求めて、（二八会の仲間と）供に手を結び楽しんでいこう。

古き良き友よ
乾杯！
螢子

内容　　頁

『私の担任、今、何処に』　３年４組　桑原　正彦（和男）（沢見中）
『化学部顧問 甲斐 建先生』　村谷博美（天籟中）
『随想　我が師の恩』　川畑喜與登（沢見中）
『その一先生の想い出』　八尋雅彦
『その二先生の想い出』　八尋雅彦
『その三先生の想い出』　八尋雅彦
『ああ！英語部』　美坂邦彦（大谷中）
『チョット大きくなった息子達』　仲田

『私の担任、今、何処に』

三年四組　桑原　正彦（和男）

（沢見中）

三年間全て、松ちゃん担任、ただ二人、里見と桑原ただ二人。
三年の、クラス発表、朝だった、一人の女生徒、寄ってきて、
「桑原君、今年も松浦先生、担任よ。」笑いながら去って行く。
英語授業のはずなのに、映画の話ばかりして、一体、今は、何時間。
今度こそ、英語絶対、赤点と、覚悟しつつ、通知表を、開いてみれば下駄４０、これじゃ赤点なりはせぬ。
「ここですが。」英語の質問してみれば、数学、教える松ちゃんに、貴方の担当何なのよ。
雪の朝、卒業式のその後に、委員長でもない僕に、
「卒業証書を、持ってきて。」松ちゃん、僕に何故頼む。
全て落ち、報告に行けば、松ちゃんが、
「ここがいいぞ」と、予備校の、パンフ渡してくれました。
人並みに、一浪終わりに、内申書、もらいに戸高を訪ねれば、
「松浦先生会えますか。」僕の問いに事務局の、困った顔して返事なし。
同窓会、名簿取り寄せ、松ちゃんの名前探せど、見い出せず、一体何があったのか。

思い起こせば、三年間、松ちゃん、あなたの、相手して、他に話を聞く生徒、いなくて僕を担任の、貴方のクラスに引っ張った。
同窓会、男子クラスで、松ちゃんが教室入れば、全員が、机後ろに座ってた。そんな話を、楽しげに、それも確かにエピソード。
「坊ちゃん」の、時から生徒に鍛えられ、教師が育ってく。松ちゃん、貴方は、「赤シャツ」も「山嵐」にもなれぬまま、何処かに去ったのか。
夜宮を巣立ち三十余年、総務・人事の仕事して、しかとは、今では分からぬが、思う事が時にある、松ちゃん、貴方も今で言う、「心の病」だったのか。

「かまやつひろし」の歌にある、
「松ちゃん、今頃、どの空の下で、俺と同じあの星みつめて何思う。」

追伸：私の三兄姉弟。同じ戸高の同窓生。兄の担任、加藤先生。姉の担任、山口先生。
弟の宿命、「ああ、桑原の弟か。」
＊兄は、〇〇処分の経験者。姉は、陸上部でもないのに、若戸大会の短距離走代表。
全ての先生に感謝して、恩師との出会もお釈迦様の試練、施しと思いつつ、合掌。

『化学部顧問 甲斐 建先生』

村谷博美

（天籟中）

一年生の夏、熊本と宮崎の県境にある市房山に登った。毎年、九州各地の山に登って山頂の土を採取し、これを分析するのが化学部のテーマだった。夜行列車とバスを乗りついで、登山口にたどり着いた時は、寝不足のためか身体がだるかった。そこから重いリュックサックを背負い、真夏の太陽に照らされながら歩いた。当時は、水を沢山飲むと汗がでるばかりで、かえって疲れるという、とんでもない誤解がまかり通っていたから、のどが渇いても、水はほんの一口飲むだけ。私は、脱水症状をおこしてフラフラになった。

翌日、加来と私が、甲斐先生とともにテントに残ることになった。加来も私も、疲れがとれてなかったせいか、テントの中を整理しているうちに眠ってしまった。あくびをしながら外に出てみると、雨が降ったらしく、地面がぬれている。外に出していた荷物は全て片付けられ、薪も濡れないように覆いが掛けられていた。甲斐先生がしてくださったのである。加来と顔を見合わせていると、「疲れはとれたかな」という先生の声がした。

翌年から、少人数の山登りはやめて、設備の整ったキャンプ場に行くことになった。女性がふえてきたこともあり、多くの部員が参加できることを目指した。一学年上の先輩たちの英断であった。

我々が三年生になった夏は、福岡市早良区の山中のキャンプ場に出かけた。ところが、２

日目は台風が近づいて、雨。風はまだ弱かった。三年生が集って、予定通り３日目までキャンプを続けるか、大事をとって帰るかを話し合った。皆が意見を述べおわったところで、甲斐先生のお考えをうかがった。先生は、「決めてよいかな？ …… 折角、やって来たので、途中でやめるのは残念じゃが、皆の安全を考えると、今回は帰ることにしよう」。全員の意見をしっかりと聴いてくださったうえでの結論であったから、続行を主張していた者も納得した。

これも三年生の夏のある日、村田がスイカを持ち込んだ。新しい校舎の三階にあった化学教室の窓に腰掛けて食べた。よく冷えていて、美味かった。しかし、中庭にむかって種を飛ばしたのは、まずかった。中庭をはさんだ反対側の校舎の一階から、校長の岸先生が眼にしたらしい。次の日、甲斐先生が「スイカを食べてもいいが、窓に腰掛けて種をとばすのは、やめてくれ。」とおっしゃった。先生が校長に謝罪してくださったことは、よくわかった。なんとも申し訳なかった。

私の高校時代は、化学部の友人とともに過ごすことにより、充実したものとなった。そして、時がたつとともに、この３年間を見守ってくださった甲斐先生の温かな眼差しが、はっきりと感じられるのである。よい先生にめぐまれたと思う。

その甲斐先生も、先年、お亡くなりになった。ご冥福を祈るばかりである。

随想『我が師の恩』

川畑喜與登（沢見中）

昭和四十二年父が精神の病で倒れ、船員生活から闘病生活に変わり我が家の経済状態も逼迫し始めていた。

福岡教育大学（体育教師）を目指しての戸畑高校入学であった。父の病状も一時回復の兆しがみえていたが高校一年の時再び入院。

大学進学に一縷の希望をいだきながら、高校生活を送ることになった。

一年八組（今石先生）、二年三組（溝口先生）三年三組（久保先生）と三先生にお世話になったが、今振り返れば楽しい高校生活であったと言える。というのも高校生活が青春時代の最後の学園生活になる！との思いを強くしていたから、部活動、生徒会、文化祭実行委員会、予餞会実行委員会、修学旅行委員会と、ありとあらゆる活動に顔を出して一生懸命やることができた。

二年生の三学期、三年生を送る予餞会の実行委員長として準備から当日の司会まで取り仕切ってきたが、演劇部の演目に入ろうとしたとき、舞台の準備に時間がかかっている様子なので部長の武田雅子さんに「どのくらいかかる？」と聞いたところ「もう少し」とあせった声で返事が返ってきた。間をつなぐには下手な喋りより余興でもと思い、文化ホールの緞帳の前で皿（どんぶり）回しをやったことが忘れられない思い出である。（文化祭だったか、こ

の予餞会だったか記憶は定かではないが新立君が皿と棒を持って舞台に駆け上がってきて助手を務めてくれた）

三年生のクラス分けで文系の三組、担任は久保先生となった。（怖い先生とのイメージが定着していた）この時も生徒委員を買って出て教室と職員室の往復が日課となっていた。一礼して「先生、清掃が終わりました。ホームルームお願いします。」「分った。すぐ行く。」こんな短いやり取りが一年間続いた。

ここで久保先生のエピソードを少し書いておこう。ある日の一時間目の数学の授業「起立、礼、着席」と号令をかけ終わるなり、先生「今日は二日酔い。この埋め合わせは後日必ずする。」と言い、教卓にうつ伏せになるとたちまち驀睡状態、生徒静かに自習。終業のチャイムがなると、何事もなかったように教室を退室された。清掃後日課となっていた報告「ホームルームお願いします。」と職員室に行ったところ、先生言わく「今から数学の授業をするから全員教室にいるように」と。今流の言葉でいうと「本気（マジっすかー）」　皆従順に授業を受けた記憶がある。今の時代では問題になるかも知れないが何とも豪放磊落、責任感を感じさせる先生の一面が妙に印象に残っている。

十二月のある日、進路相談で先生と個別面談が始まった。「家の経済状況で受験は見送り、一年間アルバイトをしながら浪人します。」と言ったところ、先生一喝「進学する方法はいくらでもある。三年間を棒に振るのか、良く考えて返事しろ。」と・・・・この先生の一言で現

役受験を考えるようになり、長崎大学商業短期大学部（夜間三年間）を受験してみようとにわか受験勉強に取り組んだのがその年の暮れからであった。試験日が国立二期校と同じ三月二十四日だったので、卒業式も終わり、大多数の同窓生が進路も決った頃でもあった。合格の知らせは電報で頼んでいたので、その電報を持って職員室へ報告に行った。

三年三組の教室で先生と話しをすることになり、一応の祝福を受け、先生にこう言った「有難うございます。高校生活の締めくくりができました。自信がついたので、一年間学費を稼いで来年再度挑戦します。」久保先生「何ぼ足らんとか？」「入学金の三万円が・・・・」すると先生ポケットから財布を取り出し、私に三万円を手渡し、「これですぐ入学の手続きをしてこい」　あふれる涙をこらえながら、ただ、ただ頭を下げるのみであった。

高校卒業一年目に三年三組のクラス会を開き、クラス仲間数人と久保先生を囲んで近況を報告しあった。担任のころの先生とは似ても似つかぬ様相で、終始笑顔で「そうか・・そうかと」頷き、酒を飲まれていた姿が思い出される。

大学生活、社会人生活と紆余曲折はあったが、今こうしていられるのも先生のおかげ、おかげさまでとしか言いようがない。先生の訃報を風の便りで聞いたが、当時は為すすべもなく、今はただ先生のご冥福をお祈りするばかりである。

二八会が本格的に立ち上がり、葛城君の尽力で全国に散らばる同窓生が二八会のホームページで近況を語り合える機会を得られたことに感謝しつつ筆をおきたい。ありがとう！

瞑想

わが師の恩

螢子

その一【先生の想い出】　八尋雅彦

とにかく酒が強くで無鉄砲な先生！愛馬の調教師の先生。レースが終わって一緒に一杯飲みながらいつも【一番は瞬発力】が口癖の先生。“展開もあるが距離、調整、追い切り、騎手との呼吸、いろいろあるが一番は瞬発力”といつも講釈をしてます。私と馬？がとてもあう先生です。仕事や遊びにおいても、先生の口癖【瞬発力】。その中に感じるのは計算し尽された調整過程、勢い、勝負強い手綱、ラストの【瞬発力】競馬の話だが人生にも通じるヨカ言葉で好きな言葉です！愛馬も瞬発力で頑張ってもらいましょう！

その二【先生の想い出】　八尋雅彦

浅生小学校の担任だった福山先生(あとでわかったのですが北野くんの親戚)。卒業文集に【強くなれ】と書いてあった。小学校の時、先生に“何に強くなれ”なんですか？と聞くと大きくなったら分かると。そして、北野の結婚式で再会。先生にその話をした時、笑いながら【挫折した時、悲しい時、貴方の夢が叶うように教え子に言ってるんだよ】むー三十歳になって始めてわかった言葉ですたい！

その三【先生の想い出】　　八尋雅彦

二年前、私は小学校育成会会長を十九名の抽選に敗れて？してました。やっと任期を終えてほっとしてた時、校長先生、教頭先生が【お疲れ様でした。明日一杯飲みに行きましょう】とのお誘い！芦屋の高級料亭で先生二人と育成会会長副会長の四人で想い出話をしながらガンガン飲みながら、小学校の歴史と伝統を語りあった時、突然、校長先生が正座をして“ＰＴＡ会長を引き受けて下さい”学校も伝統と歴史を再び築く、断ると，引き受けてくれないと私も校長を辞めます、酔っぱらって受けましたがプロの交渉力を再認識しました(笑)

『ああ！、英語部』　　美坂　邦彦　　（大谷中）

高校時代で個々人の記憶は鮮明ではあるが、一年のとき二年のとき何組に所属していたか担任はだれだったかは全く思い出せない、かろうじて三年は七組で加藤先生であったことは覚えている、卒業アルバムに三年の集合写真があるからであろう。そうなんだ、じつはクラスには所属感はきうすだったがクラブにはたしかに所属していた強烈な記憶が残っている。なぜかと言われると、ひたすら面白かったとしか言いようがないが、いろんなことを皆で学んだ。

酒・煙草・麻雀、、、エトセトラ、、、エトセトラ。学んでないのは英語だけだった。

なぜ英語部に入ったのかは、二つ上の姉がうちの高校にいて英語部に所属していて、メンバーがおもしろいよ、というわさに誘われるままふらふらと入ってしまったという、けっこういい加減な動機だったと思う。

確かに、先輩の二年三年生といろんな人がいた、妙に足が短かったＸＸさん、いつも英和辞典をもって歩いていたＸＸさん、宮崎の航空大学にはいったＸＸさん、バーのマダムのようなＸＸさん、漬物屋のご主人となったＸＸさん、もちろんうちのお姉さまには、家同様クラブでも頭が上がらない。でも、結構みなさん成績がよく、授業が終わると部室に集まって、蚊取り線香が使えないまま、蚊にさされながら黙々と勉強をしていた。

この部室が変な部屋で、天籟学館は三年のときに建て替えとなったが、その入口の横の両開きの駄菓子屋のような部室で、なぜか土足のままで出入りできた、今にして思えばどうも部室というより、物置といった内容ではあったが、妙に暖かくて居心地がよかった。良かったのは部屋の加工が自由でというか勝手に音を立てない程度なら見てみぬ振りをしてくれて、裏側の壁土を掘りぬいて、別荘などどいってはしゃいでいた

いっしょに入部したメンバーは、荒井・望月・大浜・羽立・井村・三好・渡辺・小森・小林・藤木・南條・古森だったような、抜けていたらすまん。今にして思えばフィーリングカップル六対六であるが、結局成立したカップルはいなかった。それときちんと今英語を話せるのは荒井だけだろうか？女性軍はどうだろう。

そうだ、あの核弾道三好兄がいたのだ、あの三好兄弟によって、英語のＸＸ先生が辞職に追い込まれたという伝説の三好兄弟である。でもあの英語のＸＸ先生は実際に英語がしゃべれる先生で、ほとんど英会話能力のなかったと思われる他の英語の先生達のなかでは異色ではあったのだが、先生と会話能力とは別物で、最初の挨拶で早く結婚したいから先生になったなどとふざけた挨拶をしたＸＸ先生は三好兄弟に粉砕されなくてもそのうち消える運命にあったのかもしれない。

なんといっても英語部の最大の見せ場は、やはり文化祭である。文化祭では英語部は英語劇しかやっていなかったようにみえたかもしれないが、英語劇・英会話・展示三部門に分かれて結構いろいろとやっていて、英会話の方も英語の寸劇を行っていてこちらも時間をかけて準備してやっていた。

そこで、その英語劇である、夏休み前から、まず日本語の台本を作成して、それを英語に訳して先生に見てもらって、せりふを覚えて練習して、背景の書割を作成して、衣装を縫って、照明をじょうずにあてることができるように、黒崎の東洋ショーに勉強にいったりして、なかなか大変なイベントだった。一年の時は西遊記で、孫悟空を案内する老人の役を・やって「プリーズ・カム・ディス・ウェイ」のせりふは今でも忘れない。二年は、忙しかったせいか、なんのセリフもない乞食役、やはりちょっとは出ないと落ち着かない、三銃士に乞食が必要かは不明だが、ともかく少し出場させてくれという願いがかなったのであろう。

二年になって、なぜか英語部の部長に選出されてしまった、やはりリーダーシップがにじみでているのかと思ったが、どうもいろんな問題がおこって職員室へ当時顧問であった先生のところに謝りにいったり、予算の獲得に先生と交渉したりが主な仕事で、先生への謝罪能力が見込まれての部長選出だったときづいたのは、夏休みを過ぎたころであった。

当時上記個性のあるメンバーのリクルートが幸いしてか、英語部の後輩もたっぷりと入ってきて全盛期には六十人ぐらいにはなったかと記憶している。なんせ、私が部長なもので、方針としてはいかに楽しく高校生活を送るかのみ追求する部となってしまった。もちろん英語をつうじてではあるが、英語部の清き正しき流れが、我々の世代でねじまがったという声もきいたが、無視、無視。

夏には、みんなで合宿と称して、テントをかついてキャンプにいった。この時に、大人の英語部の先輩が同行した、この先輩が同行することで学校からＯＫをもらっていた。青海島や小倉の山奥にキャンプにいって、飯盒炊飯・カレー作成など鍛えられた、もちろんアルコールなんてない健全な内容で、思いもよらぬヤツが料理が上手かったりして新鮮な体験であった。

それと、十二月三十一日の朝三時頃に集合して、皿倉山にご来光を拝むために皆で歩いて登った、山の上でたしか雑煮かあるいはお汁粉かを食べるために、鍋やたきぎをかついで登ってゆく、望月が重いといいながら、たきぎを捨てながら登っていたので、鍋をわかすのに

どうすんだということなったことを覚えているが結局何か食った記憶があるので、だれかがなんとかしたのであろう。山頂で見るご来光はいつもの太陽より大きな気がした、とくに正月のものとなるとこれはまた格別である。

でも、クラブに入っていろんなことをやるのは楽しかったが、やはり自分の時間がなくなってしまう特に部長なんかやらされると、ゆえに大学時代はクラブには入らないようにしていたが、後日ドラマ「愛という名のもとに」を見て、やっぱりなにかやっていればもっと楽しかったのかとは思ったが後の祭りである。

ついでに、とにかく大学時代は腐るほど時間はあったが本当に金がなかった、就職したら時間はなくなるかもしれないが金は少しは楽になるであろうと思っていた、本も古本ではなく新刊のハードカバーが買える、飲み屋も国道沿いの屋台ではなく中洲で豪遊ができるとおもっていた、だがしかし就職してみたら時間も金もない世界であった。

二八会同様に、英語部の同窓会もたまにはあるらしいが、まだ一回も出席できていない、姉いわく「あんたらの世代はだれもきよらん、あんたらあの時代も自分たちだけで本当にたのしんどったけんね」などといわれ、反省しきりだが、そのためだけに戸畑へ帰るほどの熱意はない。

『チョット大きくなった息子達』　　仲田

今年で五十四歳。会社人間としては定年まであと・・・・と考えるのはチョッと早い？遅い？

去年、会社からそろそろ定年後の用意は出来ていますかということで一日セミナーに参加して定年後【金】【時間】【健康】について考えなさいとのことでした。

【金】なし　【時間】沢山　　【健康】不安　　というのが答え。

この文を考えながら一時間位走ってみましたが、なかなかしゃれた文章も思いつかず。走りに行った公園は小学生の集団で一杯。一人警備の様に高いところから見ている先生がひとり、なんか変な世の中に・・・。自分が子供の頃と随分違ったような気がします。以前、戸畑での二八会の前に大谷小へ行ってみましたが外から見ればほとんど変わっていませんでしたが、この時も中から教員らしき人が、校舎の外から中を見ていたらほとんど不審者を見る目で見られました、全くある意味いやな世の中です。

これは今年（二〇〇七年）の五月の連休に書きかけた文章、あれから三ヶ月夏休みも終わりまた仕事、このパターンもすでに三十数回。独身、結婚、子供の成長といろいろパターンで夏休みを過ごしました。今年は新しい形の夏休みとなりました。今までは、子どもを連れて行くのがパターンでしたが今回は子どもに連れて行ってもらった様な形でした。少し大きくなった子どもとの旅ができた今年でした。

旅したところは比国。二年前の子供の留学先、今は大学五年生将来を考えると中々　世間には出ることが出来ず頑張っている？とのことのようですが。それで、今年の夏は土地感のあるところへいっしょに行った次第でした。予約したのは往復の飛行機のみ、今までは国内海外も含めどこに泊まるまで全て予約していたのが何も予約をせずに比国へ。

行きの飛行機の時間を考えると成田に着く為には始発の電車それも大変なので成田まで車で行くことになりこれも初体験。無事成田に着くと比エアラインは夏の里帰りで一杯。その光景は奥さんが比人、旦那は若干年上の日本人、横には大量のみやげ物（日清カップヌードル塩味）。子供の話では親戚・近所と数が必要また味が合っているとのこと。さすが良く知っている。その日の昼過ぎにマニラに着きタクシーでお世話になっていた大学の中にあるホテルへ、予約もなく子供の流暢なタガログ語（良くできました）で無事チェックイン。当日はあいにくの雨、実は比国の八月は雨季ということでマニラに着いた時から雨。チェックインをしている時　掃除のおばさんが台風になったのよとひと言。明日から天気チョット心配・・・・。

雨の中、構内を走っているジプニー（乗り心地は悪いが安い市民の足、行き先までの距離で料金が決まっている様。運転手は一人で運転しながら料金の徴収まで。徴収と言っても乗客同士で受け渡ししているので運転手の後に座った人はかなり忙しい）で近くまで買い物。雨の中、この国の雨水の処理はすぐ詰まり道路が川状態のためビーサン購入。夕食は構内の

生協で子供の生活を垣間見た感じでした。日本の食事の様に豪華では全くありませんが、味も良く帰りは果物屋さんでマンゴーを買ってこれも安い。ホテルへの帰り構内にある違法建築（大学とは全く関係のない人が違法に住んでいる、日本では信じられない）の店でビールを買いに行ったところ、店のおばさんが子供の顔を覚えている様子（話を聞くと毎日通って大量にビールを買っていたとのこと二年前のレートでは一本五十円だったので安くて飲みすぎた？）。どんな生活をしていたのか？。ホテルで乾杯しようとしても栓抜きが無いと思ったらドアのカギのところであけてくる始末、留学中の生活の知恵(おやじは知りませんでした)。このあけ方は比国にいる間お世話になりました。次の日は雨もあがり構内を散歩、大学の構内？という感じです。

この国では子どもは掃除などしてよく手伝っていました。考えれば日本では残念ながら見なくなった・・・・。今日はマニラ観光、子供には市場のような所と、観光の本に載っているような所と注文だけつけ後からウロウロ。息子に案内されながら行く町は何か危なさそうに感じたのは日本での安全ボケなのか？どこの路上でも露店がでていて同じような物を売って商売になるのか。よくメシ食っていけるなという感じでした。地図に載っている観光地は植民地時代からの建物。日本に帰ってきてから、九月に比国の第二次世界大戦の頃のことをテレビでみて複雑な思いとなりました。今日で三日目、今回の旅行ではパック旅行と違い食事はついてないため自分達で好きなものを食べることができる反面、調達するのは行動が必

要。今朝は大学の外のパン屋さんまで調達、うまいと言っていたパンはなかったものの異国のパンもおいしく食べることができました。パン屋さんからの帰り構内で体育の授業で走っている学生や早朝のジョギングを楽しんでいる人（俺も走りたい）その横を真っ黒な煙(石原都知事の一言で首都圏からは無くなった)を出しながらジプニーが何台もは走って所をみると車関係の仕事をしている者としては複雑な気持ちでした。

朝食後、今日は大学のホテルをチェックアウトしてルソン島の南の島へ移動。行程は、タクシーでバスターミナルまで移動し、バスで港まで移動、船で島までのコースどれも思い出になる乗り物でした。まずタクシー、もう三日目のため何回も乗ったのですが、全てカローラかサニーしかも八割は昔のカローラ、話では日本からの中古の車のハンドルを右から左へ変えインストもそれに合わせて変えるとか徹底していました。車は全て古くどれだけ走ったのかスピードメータも動いてないものもありこれだけ走れば車も本望？。

次はバス（約三時間）で南の方へ、乗る前に切符はどこで買うのか回りを見ていると、向こうからどこに行きたいのかと言ったらこのバスへ乗れと係のおっさん。すぐに出発この国も渋滞はスゴカッた。幹線の高速道路が一本のため集中して渋滞とのこと、どの国も大変です。途中で車掌が切符を売りにきて切符を買うのだが、切符は懐かしいパンチで穴をあけるものでした。途中のバス停？のようなところで何かの食べ物売りが乗ってきてこれいらないか、これはどうかと入れ替わり売りに来るのは若干まいった。バスといっても年季が入って

いてこれも日本からの中古品がかなり走っているようで、日本語『非常口』が全く変なところについていたりしてこの国の人の改造テクはたいしたものです。

バスの終点（バタンガス）からミンドロ島まで船（船といってもバンカーボートという船の左右に竹が取り付けられているボート）で移動。始めはフェリーの様なものと思っていたが聞くとそのような船で一時間以上乗るとのこと、また台風の影響が残っているようで港の中も高い波。予定の時間より遅れて船が到着。波が高く船の穂先が二メートルくらい上下している本当に乗れるのかなり不安。日本では絶対出港できないのではと思うくらい大変でした。乗り込む時の気持ちは、ちょうど回っている長い縄跳びに入るような気分でした。落ちなくて良かった！。船といっても大きなボート周りに波よけのビニールがあるのみ隙間から波が入ってきてぬれる客続出。水深が浅いのか穂先の案内人の指示で無事到着。こちらは波も無く無事下船。

今日の宿はまだ決めてないためあてもなくホワイトビーチなるところへ。なんと移動はトライシケル（バイクの横にサイドカーをつけた乗り物、排気量一七五ｃｃクラスに五人プラス屋根の上に荷物、輸送力は軽自動車以上）に初体験。乗った気分ははっきりいて良くありませんがどうも観光客の移動の手段は大きなホテル以外はこれのようでした。二十分くらい揺られビーチへ到着。季節としてはオフシーズンでしまっている店もあるものの、早速子供が三日分の宿の交渉、『一人千円を九百円にするとか、冷蔵庫をつけるとか言っているけどど

うするおやじ？』あまり探して回る癖の無いおやじとしては『ここでいいわ』決定。まずはホテルのレストラン（日本の海の家）でビールと昼飯、こちらの旅行中は昼間からビール（サンミゲールライト：お世話になりました）二～三本、良く飲みました。

次の日のシュノーケリングということでまたもや子供が偵察、ビーチのショップで情報を仕入れたりホテル下でウロウロしている店の従業員？から聞いて三人六千円でトライシケルで送って船代込みでどうだという話。次の朝、下で待っているトライシケルで個人のバンカーボートへ。船に乗って出港したら小さなバンカーボートが近寄ってきてシュノウケルはいくらで貸すぞ、下はサンゴだから靴がいるぞとよくできているストーリとなってきてこのボートのロープへつかまっていれば下が良く見えるぞ全部で千円でどうだという感じで小出しにいろいろと、こちらとしては商売うまいのうという感じでした。最後はそこにいくとアコヤ貝が沢山あるけど〇〇円　うにもあるがどうする本当に商売がうまい。しかし楽しくきれいな海で沢山さかなを見ることができ楽しむことができました。帰りに明日も来るならボートの観光とバーベキュウとシュノーケリングで〇〇円どうだとの営業、こちらとしては特にのんびりすることしかなかったので明日の分を頼んで港まで、港の食堂でビール付き昼食三人で食べてもびっくりするくらい安く済みました。その日の夕方は夕日を見ながらビーチを散歩。一歩ビーチに出ればマッサージ、土産、食べ物売りと絶え間なく人が近寄りチョッと大変、そして晩飯何を食べる？こちらの国のご馳走はバーベキュウとのこと子供も留学中に

友達と比国を旅行したとき友達の親戚の家に泊まったときはヤギか何か丸ごと焼いていたとのこと。明日の昼もバーベキュウですが今晩もバーベキュウとなりました。

ビーチ三日目、頼んでいたトライシケル(昨日ビーチまで送ってもらった人)がお迎え、ボートのおやじに言われたところまで行き先を告げて出発。昨日もそうだが、港というより砂浜、そこまでメーンの通りからトライシケルとしては大変な道を入っていきどうにか到着。トライシケルの運ちゃんは俺もボートは持っている、次は俺が案内してやるといってと息子。この島の人は全員が観光業という感じです。浜に着くと運ちゃんとボートのおやじは親戚とか。こちらとしてはチョッとびっくり。先ずはデッカイ方のボートで島をクルージング。ボートのおやじさんの話では最近は韓国の人が随分、土地を買ってホテルを建てているとか。そういえば韓国人の観光客は多く、よく間違われた。一時間位クルージング、中々気持ちのいい眺めでした。次はシュノーケリング早速小さなボートのおやじがやって来て一式貸してもらい海のなかへ。昨日はマスクが顔に合ってなく水が入ってきていらいらしていたらパパさんライフジャケットどうだと言われこれでも以前は水泳部のはしくれそう簡単にお世話になるものかと拒否。今日はメガネ持参で来てよく見えました。サンゴと小さな色のきれいな魚はきれいなものでした。今日もボートの上まで土産物屋さんが着ます。真珠はどうだ、これは本物だとライターであぶり出す者もいたりしてだけど買いませんでした。

その内昼となり上陸。持ち主の無い？ビーチでバーベキュウは既に始まっていました。大

きなボートのおやじさんが先に準備していたようで量は随分あるようです。あとで解ったのですが客の人数以上に仕入れているようでした。途中から全く知らないおっさんも仲間にはいりいろいろとしゃべっています。肉、魚、ご飯、果物（マンゴー　バナナ）とお腹一杯になったところでご馳走さまといったら三人が勢い良く食べ出しました。それでもあまっていました。それは土産になったようです。比国は非常に放し飼いの犬が多いようで特にこの島も同じビーチでは夜寝ている犬たくさんいて飯はどうも残飯のようで生ゴミの処理をしているようです。バーベキュウの鳥の骨もちゃんと食べていました。

　食事後は昼寝、本当にゆっくりしました。昼からまた、シュノーケル久しぶりに海で泳いだり潜ったり楽しく過ごしました。潜るコツを子供に教えてもらい挑戦。コツは息を吐ききること、考えれば当たり前自然と沈んで行きます。今晩は海の最後の夜、食事後　子供と飲みに浜まで、子供と外で飲むのは初めて？家の中で飲むことはあっても外で飲むのはなかなか機会もなくチョット変？。店の中ではボインのオネーちゃんが愛想良くしていました。帰りに子供にあのオネーちゃんオカマだよと言われおやじとしてはさっぱりわかりませんでした。どこで見分けがつく様になったのか？。夜、星空を見るために夫婦で浜に(横浜ではまず絶対無い)やっぱりきれいな星空が見ることができた。流れ星、天の川もう何年も見なかった星空でした。町の明かりがなく、きれいな空であれば見えるのだなと思った次第です。明日でこの島ともお別れです。きれいな星空を満喫しました。

話は前後しますが、このホテルは若干おんぼろで子供がシャワーを浴びて出ようとした時ドアが故障して開かなくなり従業員を呼んで開けてもらう様頼んだら工具も無くなんと下のレストランからフォークをもってきて開けようとトライ。しかしうまくいかずこの兄ちゃん何を血迷ったかドアを蹴っ飛ばすしまつ、中にいたのが子供でよかった。蹴った勢いで下の空気抜きみたいなところが外れその小さな所から中に入ってやっとのことでドアをあけてもらいました。丸一日は壊れたままでした。

次の日、マニラに向かって逆コース、バンカーボートは海の途中で客を拾いながらバタンガスの港へ着き、またバスでマニラへ。来るときと同じように物売りが止まれば乗ってきて目の前まで来ていろいろな食べ物を売っていく。子供は適当に買っては食べている、それを取って食べてその国を満喫している夫婦でした。渋滞の中、マニラに着き今晩のホテル探し。来る前にネットでホテルの予約を見れば盆の季節？なのか一杯、実際　直接ホテルでも一杯でした。

観光案内で探してもらいなんとか宿を決め、マニラ市内見物。ホテルの近くのモールまで行く途中は歩道は長く露店で埋めつくされ日本の朝市とはチョッと違った感じ。モールは大きなものがいくつかあるそうで中は綺麗で横浜の田舎者としてはスゲーっていう感じでした。この季節は雨の多い時期でこのきれいなモールの外は雨が降ると水が二十センチ位溜まっている状態です。外と中のギャップは何なのかという感じです。外では路上で生活している親

子、中は日本と同じようなものが並んでいる。これが今の比国の実態なのかと感じた次第です。

次の日は子供の買い物に付き合い古着と偽物市場へ、親としては本物買えばと考えますがこのマニラには随分、古着屋はあるようです。世界のどこからこんなに集まるのか、小さなビル全体が古着屋だったり、偽物ブランドだったり、何本の路地が偽物DVDショップとか何とも凄い国でした。こんな旅行はツワーではできないのでその点では子供に感謝でした。

最後の夜、子供と二人でマニラ湾の横まで飲みに行きましたが、そこにたどり着くまで客引きで大変でした。泊まったところは東京の歌舞伎町見たいなところ。まあこれもマニラかと思いながら客引き?をことわりながら海岸の飲み屋さんへ、飲み屋といっても下が店で二階は青天井、まるでビヤガーデン、上の飲むところは他の店と共同使用とのこと、このへんではよくあることらしく、これが子供と飲む二回目でした。店員の人に記念写真を取ってもらいこれも思い出。子供はこれから友達と飲むとのことこれで比国での朝帰りは二回目となるようです。一回目は大学のホテルの一日目、友達は大切にしましょう?わずか一年の留学で友達がたくさん出来うらやましい限りです。しかし、いまや親父ですが自分の親父とは外で飲むことも無く少し寂しいことでしたが、今回の旅行では二回飲むことができ楽しく過ごせました。次の日は無事日本へ向け帰国、大きくなった長男との旅でした。

□編集スタッフ

岡田守弘、勝原幸恵、新立巖、

都留陽子、美坂邦彦、若原洋子

□イラスト画は川畑喜與登さんに、題字はミセス新立さんにお願いいたしました。

28会

非売品
「青楓（あおかえで）第二号」第一版　2010 年 8 月 21 日発行

編集人　「戸畑高校関西二八会」
発行人　「戸畑高校関西二八会」
発行所　「戸畑高校二八会」